

第8回 岸和田市公共交通検討委員会 議事要旨

日時：平成24年9月28日（金） 14:30～17:00

場所：岸和田市立中央地区公民館 2階 講座室3

- ・開会
- ・事務局より出席者確認
- ・井上副市長より野谷委員へ委嘱状交付
- ・日野会長挨拶
- ・事務局より配布資料の確認

○事務局より「資料1 試験運行利用実績と利用のお願い」「資料2 試験運行利用実績」について説明

○質疑応答1

(委員)：利用者がかなり少ない。

東ヶ丘にバス停を増やすことはできるのか。

(事務局)：路線バスとの競合があり、当初は難しいと判断していた。地域のボランティアでバス停まで送迎する予定であったが、対応が難しいようである。

(委員)：東ヶ丘には入口が2箇所あり、手前から上がって行った箇所に1箇所増設を希望しているようだ。

(会長)：これは、路線バスとの重複の問題。老人クラブから、こうすれば利用が増えるという意見。

連合町会長の意見が、PRは役所のやることと読め、主体者として意識されていないように感じられる。連合町会長と老人クラブとがもっと連携すると何か知恵が出てくるのではないか。

(事務局)：連合町会長にはPRも含めてお願いをした時の意見であり、当事者意識は持ってもらっていると思われる。

(会長)：連合町会がもっと関わらないといけない。

このバスの目的は1つが空白地区解消、もう1つは高齢者の移動手段の確保。その点では老人クラブに切実な声があり、そういう人たちに交通サービスの提供が必要。これに連合町会で後押しをしてもらいたい。

(委員)：もともとは空白地区の解消で、地元から要望があって運行しているのに、この意見だと市が勝手に走らせてPRを強要しているような感じがする。

(会長)：「車に乗れなくなったら必要」とあるが、それがいつなのか。近い将来かもしれないので、若い人にも危機感を持ってもらえるようにしなければいけない。

(委員) : 意見の中で、利用が増えるような項目があれば、こちらの努力も必要。

(会長) : 今後の可能性も含めて後ほど議論いただく。

バス停ごとの乗降数は想定通りだったか。

(事務局) : 市民病院の需要の多さは想定外だった。

(会長) : 片道利用が多いというデータとなっており、往復で乗ってもらえるよう検討が必要。

利用状態としては、固定的な利用は1便 6.5人ぐらい、最大で8人ぐらい。平均6.5人であれば、ある瞬間でのピークはどのくらいか。

(委員) : 15人/便ぐらいでしょう。

(会長) : 15人という全員が座れる状態。3.7人/便というときもあり、ある区間はだれも乗っていないということ。こういう状況であることを把握願いたい。

○事務局より「資料3 アンケート集計結果」について説明

○質疑応答2

(委員) : 認知されているのに、利用はされていない。PRしろと言われるが、この状況で何をPRすれば良いのか。

(会長) : 利用者が少なく、このままだと無くなってしまふということのPRが必要。

アンケートの回収率が19%と低すぎる。もう少し意識を持っていただかないといけない。

(委員) : 今後、第2次の運行テストを行うのか。

(会長) : このあと評価結果を見た上で議論をお願いする。

同乗者の有無と年齢層・利用目的などのクロスチェック結果はあるか？(無し)

何か今後に使えるようなデータ分析が必要。

(委員) : 病院利用が多い。今後、新設される市民センターなどにバス停を設ければ利用者も増えるのではないか。

(会長) : 公共施設だけでなく、南海さんとも確認をして、変えられるところは変えていけばよい。

町別集計で、東ヶ丘の回答者の年齢層が「極めて高い」というのはなぜか。

(事務局) : 市域で見ても高齢化率の高い地域である。

(委員) : 一度乗ってみたが時間が掛かりすぎて駄目、タクシーのほうが便利であるという話を聞いた。慣れていくため、転換していくための時間が必要ではないか。

(会長) : これから歳を取っていくと、逆に時間に余裕が生じるようになると思われる。移動時間や待ち時間をうまく使える方法を考えるのも一つの手では。

(委員) : 病院に行く人が多いということは、朝は急ぎで、帰りはゆっくりが良い。

バス停の利用者数をみると、田治米、東ヶ丘と市民病院のシャトルバスが良いのでは。

他の地域では、8人乗りぐらいのバンで、フリー乗降のコミュバスを見たことがある。

(会長) : 南海さんが和泉市の横山地区で運行しているバスがあったのではないか。

(事務局) : 路線バスの廃止代替として、12人乗りのワンボックスカーで地域を巡回している。

(会長) : シャトルバスは便利であるが、運行できるほどの需要が無いので難しいと思われる。

○事務局より「資料4 試験運行の事業評価」について説明

○質疑応答3

- (会 長) : 目的地の変更率は、外出機会増加と切り分けて、精査する必要がある。
利用顕在率の46%は低い。一般的には60%ぐらいであり、この差は潜在需要がまだあると言えるかもしれない。他事例と比較して、地元の熟度が低いと感じられる。地元の協力があれば、もう少し利用者数が増えるかもしれない。
- (委 員) : とにかく使ってもらえない。
- (会 長) : 他事例として、敬老の日などにパスを配るということも一つの案で、結構利用されているようである。
なかなか一部の地域だけが熱心でも続かない。
評価基準では、外出機会増加の基準値60%は高すぎたと考えられるので、評価×ではなく、一定の評価をして△でも良い。自動車からの転換も2〜3割で一定の効果がありプラス評価となる。
利用者数と収支率は連動して1つの要素なので、2項目ではなく1項目が×ということになる。
- (委 員) : 秋・冬は利用者が減るのではないか。半年の試験運行期間で評価するのもどうか。
- (会 長) : 夏の暑い日も外に出るのは控えるかもしれない。
- (事 務 局) : 現行のローズバスの実績では、2月が少なく、8月は多い。
- (委 員) : 夏の利用が下がるという事例もある。
- (会 長) : 少なくとも地元の意識を高めることが必要となる。
- (委 員) : やはり当事者意識が低い。協働の取組報告が出ていないこともその表れといえる。まず地元の方に当事者意識を持ってもらうことが大切である。
それができれば、変更による利用者拡大可能性の幅も大きいと思うので、変更してもう一度やってみても良いと思う。
- (委 員) : 今、車に乗っている人は急には乗り換えできないので、気長にやらないといけないのではないか。
- (会 長) : あまり気長にやるのも税金の問題がある。
- (委 員) : 利用すると言って利用していない20%の方は、乗りたいとは思っているわけで、何をすれば乗ってくれるのかの検討が必要。
- (会 長) : バスが無くなるかもしれないという、地域の危機感はどうなっているか。
- (事 務 局) : 危機感を持って取組んでいる地区もあるが、地区ごとで温度差がある。
- (会 長) : 評価を整理すると、一部基準を満たしていない項目もあるが、効果が認められたものも多く、老人クラブを中心として町会とも連携して、利用人数を増やすための検討をした上で、もう一度試験運行をしても良いのではないかと。
- (委 員) : 地元にも、もっと強く言えば良い。バス停を残して欲しければもっと乗るようにと。
- (会 長) : まず改善案を作って、それから再度認可が必要になるので、再開には時間が掛かる。
- (事 務 局) : 予算や認可の問題もあり、急いでも来年度、4月以降になる。
- (会 長) : 再度試験運行を行うことについても、地域へ乗客を増やすための努力が必要であることを十分説明しなければならない。

(委員)：市としては、正直な話、続けたいのか、止めたいのか。

(事務局)：このままの利用者数だと厳しい。もう少し利用者の増加が見込めれば、空白地区の解消のため継続して行きたい。市としても、税金を投入しているので、費用対効果の面からも今回の試験運行の内容について評価をした上で、今後の変更方針について検討しなければならない。

(会長)：来年度に再度試験運行を行うとした場合、この委員会をどうするか。

(事務局)：任期としては今回までだったが、もう一期延長させてもらいたい。

(会長)：委員の皆様、よろしいでしょうか。

では、評価結果については、今回の議論の内容でまとめ直し、任期を延長して、再度の試験運行に向けて議論をしていくという方針とします。

○事務局より「資料5公共交通のあり方」について説明

○質疑応答4

(会長)：市として、どのようなまちづくり、交通計画を行うかを、まず示す必要がある。その中で公共交通が担う役割を明確にし、そのために必要な課題を挙げ、施策等について検討しないといけない。

決まった形ではなく、委員からの意見を整理する形でも良いのではないか。

今後の道州制などの地方行政制度の動向を見据えると、南大阪における岸和田市の役割というものについても考える必要があるのではないか。

(委員)：来年、もう一度試験運行をして、それで廃止となった場合、今利用している人をどうするのかという問題もある。

(事務局)：今後、もう少し時間をかけて議論いただきたい。

(会長)：総合計画の始めの部分や、福祉施策など他の課の施策の資料を委員に提示して、それも含めて検討していただければ良い。今回の資料は今回のものとして、他計画との関連も考慮して、次回までに考えていく。

(委員)：堺市の事例として、高齢者の割引目を設定したところ、高齢者の利用者が2倍になった。一からの施策は難しいが、今ある路線の維持に向けた施策については一緒に考えていきたい。

(会長)：外国でもいろんな施策が試されているところであり、それを参考に考えてみるのも良い。あり方検討については、委員のみなさんからもご意見をいただいて、今後、もう少し時間をとって、取り決めていく。

その他は。

(事務局)：委員会の任期を延長させて頂いて、地元協議を行い、ルート等がある程度固まった時点で、今年度内にもう一度委員会をお願いしたい。

(委員)：半年間バスが無くなるということで、地元の意識が変われば良いが。

(会長)：委員の方にはもう少しご協力をいただきたい。

・閉会

以 上